われら肉球防衛隊！

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
われら肉球防衛隊！

【Ｎコード】
Ｎ７７７８Ｘ

【作者名】
沙φ亜竜

【あらすじ】
猫宮降人（ねこみやふるーと）は小学校六年生。無類の猫好きだ。ある日、教室に一匹の猫が迷い込む。首輪もないから飼い猫じゃないだろう。ということで、みんなで飼いたいと担任の先生に申し出る。だが担任はアレルギーで動物の毛がダメな体質。教室で飼うことはできなかった。仕方なく外に逃がしにいく降人たちだったが、心配で放すことができない。じゃ、あたしたちで飼っちゃおうよ。友人のひと言で、降人たちはその猫を隠れて飼うことにした。降人たちは猫に「ミュー」と名づける。そしてその猫を守るための組織、「肉球防衛隊」を結

成する。その後、襲い来る数々の危険な出来事、そして謎の黒猫……。去っていく黒猫の背中に叫び声がぶつけられた――二本足で立っているミューから……。猫のミューを守る肉球防衛隊のドタバタ奮闘記。

1

暖かな春の日差しが降り注ぐ中、通学路をふらふらとした足取りで歩いていく。
ぼくは猫宮降人（ねこみやふるーと）、小学校六年生。
ちょっと傷んで、ところどころ皮がはげちゃってる黒いランドセルを背負いながら、鼻歌まじりに学校へと向かっているところだ。

ふらふらとした足取りなのは、べつにケガをしているわけじゃなくて、ぼくの普段どおりの歩き方だった。
……できれば直したいのだけど、簡単に直るのなら苦労はしない。
小学校の最高学年となった今ではさすがに少なくなってきたけど、ぼくは足がもつれて転ぶことも多く、両足のひざ小僧にはカサブタができているのが普通だったりする。

と、そんなぼくの目の前を、通り過ぎるひとつの影。

「うひゃっ！　かっわい～！」

ぼくは思わず声を上げる。
通り過ぎた影は、可愛らしい猫ちゃんだった。

無類の猫好きであるぼくは、思わずその猫ちゃん目がけて駆け出していた。
そして、

「わわっ！」

足がもつれ、

「ふぎゃあっ！」

思いっきり、ひざから地面に倒れ込んでしまった。

「うぐぐぐ……」

痛みでひざを押さえたぼくは、うめき声をもらす。
通学路は固い土がむき出しになっていた。
アスファルトとかじゃないだけマシだろうけど、それでもぼくのひざ小僧のカサブタは割れ、血が溢れ出てくる。

でも、泣いたりなんかしない。だってもう、六年生なのだから。
一生懸命こらえながらも、涙がにじんできていたぼくの顔を、可愛い猫ちゃんが首をかしげて見つめていた。
とってもつややかで綺麗な毛並みの真っ白い猫。
サファイアのように澄んだ青い瞳をこちらに向けている様は、ディズニー映画のワンシーンかと思えるほど。

飼い猫かな？
でも、首輪とか、してないような……。

涙で視界がぼやけてはいたけど、可愛い猫ちゃんにじっと目を向ける。
と、そんなぼくの背後から、音もなく忍び寄る魔の手が――。

魔の手は素早く、ぼくの首に絡みついてきた。

「えいっ！」
「ぐえっ！」

絡みついてきた手――というか、ゴツくて太い腕は、容赦なくぼくの首を締め上げる。

「うぐぐぐぐぐ……、ギブギブ！　もうやめてよ、拳志郎（けんしろう）！」

どうにか耐えようしてはみたものの、すぐに限界となったぼくは、慌てて叫び声を発した。

「はっはっは！　今日は三秒でギブアップか～！　相変わらず降人は弱っちぃなあ！」

「突然ヘッドロックかけられたら、誰だってすぐにギブアップするってば！　しかも拳志郎、手加減しないんだもん！」

「はっはっは！　おれってば、不器用だからなあ～！」

「不器用だからとか言いながら殺されかけたのが、いったい何度あったことか……」

「はっはっは！　過去なんか振り返るな！　未来を見据えて生きろ！」

「拳志郎は振り返るべきだ！」

「はっはっは！」

ぼくは首を押さえながら、背後からランドセル越しにヘッドロックをかけてきていた大男に怒鳴りつけるものの、その大男からは「はっはっは」と笑い声を含んだ軽い言葉しか返ってこない。

こいつは虎間拳志郎（とらまけんしろう）。クラスメイトで、ぼくの親友だ。

昔からいつもふたりで、こうやってじゃれ合ったりしているのだけど。

拳志郎はとても体格がよく、さらに身長も高いから、小柄なぼくとしては死活問題だったりする。

そのたびに文句を言うぼくと、それをサラッとかわす拳志郎。
小学校に入ってすぐの頃に出会って以来、ずっとこんな感じなのだ。

「あはははは、ま、とりあえず、おはよう！」
「ああ、おはよう！」

挨拶がヘッドロックなんかより後回しなのも、ぼくたちにとってはごく日常的なことだ。

「ふっ……、相変わらず朝から落ち着きがないなぁ、キミたちは」
（ふぁさっ）

不意に声が増える。
ふぁさっ……と長めの前髪をかき上げながらそんな言葉を向けてきたのは、拳志郎ほどではないけど結構背の高い男子だった。

拳志郎と比べると低いけど、その分細身だから、かなりの高身長に見える。
１５０センチをちょっと越えた程度のぼくだと、思わず見上げてしまうくらいだ。
くそ～、うらやましい……。ちょっと分けてほしいなぁ。

と、そんなことはどうでもいいか。

ともかく、新たに加わってきたこいつは、拳志郎と同じくぼくのクラスメイトで、獅子威将流（ししおどしまさる）という。
お金持ちの家で何不自由なく育ったらしく、人を見下したような物言いをすることが多い。

とはいえ、それほど鼻につく感じでもないのは、なんとなく間が抜けている雰囲気があるからだろうか。

実際、今現在の将流の家は、一般家庭より裕福なのは確かだろうけど、それほど飛び抜けて大金持ちという印象でもなかった。

あまり深く立ち入るべき話ではないのだろうけど、徐々に衰退していったとか、そんな感じなのかもしれない。

「降人くん、なにやら失礼な思念を感じたような気がするんだけど、どういうことかなぁ～？」

「え？　気のせいでしょ」

ぼくは臆面もなく言い放つ。

「本当かい？　ふたりとも、どうもこのボクをバカにしてるように思えるんだよねぇ～」

「それは気のせいじゃないが」

「あっ、バカ、拳志郎！」

「むむむ！　やっぱりキミたちはこのボクをバカにしてるんだね～！？」

「拳志郎、ダメじゃんか！　本当のことを言ったら話がこじれるだけだって、いつも言ってるじゃん！　将流みたいなのは、適当にあしらっておくのがいいんだってば！」

「なっ……！　適当にあしらっておくって、降人くん、それはいったい、どういうことだいっ！？」

あちゃ～……。

ぼくまで一緒になって余計なことを言い、火に油を注いでしまったみたいだ。

こうなってしまった将流は、ネチネチとしつこいんだよねぇ……。
あとは、天の助けを待つしか……。
と、そのとき。本当に天の助けが、ぼくたちのもとに舞い降りた。

☆☆☆☆☆

「あれぇ～？　将流くんたちだぁ～。ねぇねぇ、どうしたのぉ～？」
ほんわかしたのんびり口調の声が響き、思わず「へにゃ～」と気力が抜けたような空気になる。
「あっ、みるくちゃん！　おはよう、清々しい朝だね～！」（ふぁさっ）
「おはよぉ～！　うん、そうだねぇ～、清々しいよねぇ～！　思わず、はにゃ～ん、ってなっちゃうよねぇ～！」
清々しい朝じゃなくったって、この子は「はにゃ～ん」ってなってる気がするのだけど。
この女の子は、犬塚（いぬづか）みるくちゃん。
拳志郎や将流と同じくクラスメイトの、「はにゃ～ん」としたみるくちゃんは、ちょっと舌っ足らずなところがとっても可愛く感じられる、我がクラスのマスコット的存在だ。
そして彼女がいるということは、必ずセットで現れる片割れが……。
「はにゃ～んとしててもいいけどさ、こんなところでお喋りしてたら通行の邪魔よ？　もっとも、男子三人組は存在自体が邪魔な気が

するけど」

やっぱりいた。

この失礼千万なやつは、犬塚いちご。みるくちゃんの双子の姉だ。

クラスは違うけど、妹が心配なのか、休み時間ごとにうちのクラスに来ているから、すっかり顔なじみとなっている。

「あっはっは、相変わらずいちごは冗談が上手いなぁ！」

いちごの登場に、拳志郎が声を上げた。

これは秘密なのだけど、拳志郎のやつ、いちごのことが好きらしい。

だから、普段は女の子と話すのは恥ずかしいとか言ってるのに、頑張って喋るのだ。

「え？　冗談なんて言ってないわよ？」

「あっはっは……」

真顔で返された拳志郎の笑顔は、明らかに引きつっていた。

体格のいい拳志郎は、格闘技もやっていて、すごく強い。

そんな拳志郎と本気で対決し、いちごはあっさりと打ち負かしたことがある。

女の子相手だからって、手を抜いていたわけじゃない。拳志郎は本気を出して、そして負けた。

だからこそ、その強さに惚れ込んだ、というのもあるかもしれないけど。

どちらかというと、いちごには頭が上がらないという感じだろう。

恐怖を感じてすらいるのかもしれない。

いちごの身長はぼくとたいして変わらないし、体重はもちろんぼくより軽いというのに……。

「それより、あまりふざけてると遅刻するわよ？」

拳志郎を打ち負かしたという話を聞いただけだと、野蛮で粗暴な男っぽい暴力女っていうイメージになってしまうかもしれないけど。

実際のところ、いちごはそんな印象ではない。

ちょっとつり目気味ではあるけど、マスコット的存在のみるくちゃんと一卵性の双子なのだから、同じように可愛らしい顔立ちをしているし、彼女のセリフからもわかるとおり、結構真面目だったりするし。

六組五組の学級委員をしているらしいから、人望も厚いと言えるのかもしれない。

もっとも、いちごは面倒見のいい性格だから、誰もやりたい人がいなくて押しつけられただけ、という可能性も否定はできないかな。

「あっ、そうだね。それじゃあ、さっさと学校へ……」

とぼくが先陣を切って歩き出そうとした、ちょうどそのとき。

「やっほぃ～！　みんな、今日も元気に集まってるねっ！」

さらに明るい声が、取りとめもないぼくたちの会話に割り込んできた。

「あっ、夢ちゃん、おはよう！」

「降人くん、おっはよ～っ！　他のみんなも、おっはよ～っ！　風さんたちも、おっはよ～っ！」

それは、クラスメイトの豹堂夢ちゃんだった。
いつでも元気いっぱいってのはいいのだけど。ちょっと電波な女の子、というのが、周りの評判だったりする。
ぼくや拳志郎たちに対してだけじゃなくて、吹き抜けてゆく風にまで挨拶してるところからも、その片鱗が見て取れるだろう。
そういったちょっと変わった部分だって、夢ちゃんのいいところだと、ぼくは思っているのだけど。

「夢ってば、相変わらず元気ね～。あんまり飛び跳ねてると、見えちゃうわよ？」
「にゃははは っ！　そうだねっ、もっとおしとやかにしないとだねっ！」

いちごの指摘に笑いながら答えるものの、ちっともおしとやかになんてならない。
それが夢ちゃんだ。
とはいえ、夢ちゃんは長いスカートをはいていたから、べつに飛び跳ねたからってパンツが見えてしまうなんてことはなかったのだけど。

「あっ、そうだ、夢ちゃん！　そこに、綺麗な白い猫ちゃんが……」
「えっ？　マジっ？　どこどこっ！？」

ぼくの声に、夢ちゃんは噛みつかんばかりの勢いで食いついてくる。
彼女はぼくと同じで、無類の猫好きなのだ。
だから、さっきの猫を見たら絶対に喜んでくれるはず、と思ったのだけど。

「……あれ？　いなくなってる」
「え～～～っ？　や～ん、わたしも綺麗な白いニャンコ、見たかったなぁ～っ！」
「ごめんね……、騒いでたから、逃げちゃったみたい」

心底残念そうな夢ちゃんに、ぼくは思わず、しゅん、と沈んだつぶやきをもらしてしまう。

「ううん、降人くんのせいじゃないよっ！」

ぱーっと明るい笑顔を向けて、そう言ってくれる夢ちゃんに、ぼくの心もぱーっと明るくなったような気がした。
と、そんな中、微かに校舎が見える小学校のほうから、予鈴の音が鳴り響いてくる。

「ぐあっ、遅刻しちゃうじゃん！　ほらみんな、急ぐわよ！」
「ほいさっ！　みんなで仲よくBダッシュだねっ！」
「B……？　まぁ、よくわからないけど急がないとね！　遅刻したくないし！」
「ふっ、ボクにダッシュなんて似合わないけど、遅刻なんてもっと似合わないしね～」（ふぁさっ）
「あっはっは、ま、ごちゃごちゃ言ってないで、黙って走るべし！」
「あう～、みんなぁ～、待ってよぉ～！」

こうしてぼくたちは、今日も慌ただしく小学校の門をくぐるのだった。

2

「は～い、みんな～、席に着いて～！」

パンパンと手を叩きながら、担任の先生が教室に入ってきた。

それに合わせて、仲のいい友達と固まってお喋りしていた生徒たちが、慌てて自分の席へと戻っていく。

朝の会のスタートだ。

「今日はとっても、いい天気ね～！　こんな日は河原でお昼寝でもしたいわよね～！」

ぼくたちの担任である、狐石雪菜（きつねいしゆきな）先生は、いつも本音で生徒に向き合ってくれる先生だった。

「う～ん、ちょうど一時間目が理科だし、河原で草花の観察とかにしようかな！　そうすれば、わたしは寝てられるし！」

……隠したほうがいいような本音まで、だだもれにしてしまう、なにかと問題のある先生なのかもしれない。

こんな感じだけど、雪菜先生はクラスのみんなから慕われている、とってもいい先生だ。

ほとんど友達感覚でつき合える、という印象が強いからなのだろう。

まだ二十代前半くらいのはずだから、若いといえば若いと思うけど。

それでも小学生であるぼくたちとなんの違和感もなく友達のように接していることからも、雪菜先生の精神年齢の低さがうかがえる。

「雪菜先生、そんなんでいいんですか？　というか、校長先生に告げ口されたりとか……」
「ふっふっふ、校長先生が怖くて教師をやってられるかっての！　わたしはわたしの信ずる道をゆくのよ！」

真面目な女子生徒からツッコミを入れられてもなんのその。
笑いながらそう言い放つ雪菜先生だった。

ところで、クラスのみんなは先生のことを名字ではなく、名前で「雪菜先生」と呼ぶ。
これには理由があった。
このクラス、六年二組での一年間が始まった初日、先生自らお願いしてきた、というか命令が下されたのだ。
「わたしのことは、雪菜先生と呼んでくださいね！　もし名字で呼ぶ人がいたら、容赦なく成績を落とします！」

満面の笑顔を浮かべながらそんなことを言ってのける先生に、初日から驚いたものだった。
どうやら、雪菜先生はちょっとつり目気味だから、「狐」って字の入った名字が好きじゃない、というのが理由だったようだ。

普通なら「冗談だよね」と笑って済ませるところだろうけど、雪菜先生の場合、冗談であるはずもなく……。
そんなわけで、クラスには先生のことを名字で呼ぶ人はいない。
誰だって、こんな不条理な理由で成績を下げられたくはないからね。

「ま、今日も元気に頑張っていこ～！　ってことで、べつに連絡事

項とかもないから、朝の会はこれで終わり！　一時間目は河原で決定ね！」

雪菜先生はそう言い残し、さっさと教室を出ていってしまった。

う～ん、相変わらず適当な先生だな～。

でも、そんな先生だからこそ、このクラスが楽しい雰囲気になっているのだと、ぼくは考えている。

きっと雪菜先生は、生徒の自主性の尊重するために、そういうふうに振舞っているのだ。

……いや、それはありえないか……。

☆☆☆☆☆

ともかく、朝の会を終え、一時間目が始まるまでの時間。

理科の授業で河原に行くと言ってたけど、外に出ておくように言われてはいないから、とりあえず教室で待っていればいいはずだ。

というわけで、クラスメイトはみんな席を立ち、それぞれ友達のもとへと集まって騒ぎ始めていた。

「はっはっは、えいっ、ヘッドロック！」

「ぐえっ！」

もちろん、ぼくのもとにも、拳志郎がいつものように寄ってくる。

ヘッドロックで挨拶するのは、そろそろやめてほしいところではあるけど。

「げほげほっ！　こら拳志郎！　ぼくはおまえと違って筋肉バカじ

ゃないんだから、手加減しろってば！」
「はっはっは、筋肉バカとはなんだ、こいつぅ！」
「ぐえっ！　ギブギブ！　ぼくが悪かった！」

ヘッドロックをかける太い腕によりいっそうの力が込められると、ぼくはたまらず白旗を上げる。
ぼくと拳志郎が、いつもどおりのバカげたじゃれ合いを続けていた、そんな中。

「きゃ～～～～～～っ！」

突然、女子の声が教室に響き渡る。
でもそれは悲鳴という感じではなく、好奇心に満ちた喜びの声といった様子の、黄色い歓声だった。

声を上げている女子たちのほうに目を向けてみると、そこには普段の教室には存在しないものが存在していた。
そこに見えたのは――。

「うわぁ～、可愛いニャンコだよ～っ！　真っ白で綺麗～っ！」

夢ちゃんが歓喜の声を上げているとおり、どこか上品さすらも漂わせる、綺麗な真っ白い毛並みの猫ちゃんだった。
というか、その猫は――。

「あ……、あれ、さっき見た猫だ」

ぼくは思わず席から立ち上がり、その猫ちゃんに駆け寄っていた。
……ヘッドロックをかけていた拳志郎の太い腕を、軽々と振り払いながら。

「はっはっは、猫が絡むと降人は無敵だな！」
なんて拳志郎の声が聞こえてはきたけど。
そんなことより、今は猫ちゃんだ。

この世界は猫のためにある、とすら思っているくらいの、無類の猫好きであるぼく。
うちの家族は、お母さん以外みんな猫好きなのだ。

ただ、お母さんが猫嫌い、というか動物嫌いのため、絶対に飼うことは許されない。
そんな不幸な星のもとに生まれたぼくは、猫を見ると条件反射的に抱きしめたい衝動に駆られるのだった。
というわけで、数人の女子に囲まれていた白い猫ちゃんを、ぼくは素早く抱き上げる。

「う～ん、可愛い！　毛並みもサラサラだ～！」
「ミュ～～～～！」

ぼくが抱きしめ首筋の毛を撫でると、猫ちゃんは嫌がることもなく甘い鳴き声を返してくれる。

「あ～、降人くん、自分ばっかりずるい～～～っ！　わたしも抱きたいよ～～～っ！」
「あはは、うんうん、すぐに交代するよ！　……でも、もうちょっとだけ……」
「だめ～っ！　今すぐ、抱きしめたいの～！　わたしにニャンコぷりいず～～～っ！」

猫好きなぼくと夢ちゃんを中心に、クラスのみんなが集まってきて、白い猫ちゃんを可愛がる。
一方猫ちゃんのほうも、登校時はいつの間にかいなくなっていたけど、今は逃げる素振りもない。

「うにゃ～っ！　可愛いよ～っ！」
「あれ～？　この猫、首輪もしてないよね。こんなに綺麗だけど、飼い猫じゃないのかなぁ～？」
「あっ、飼い猫じゃないなら、このクラスで飼っちゃえばいいんじゃない！？」
「おお～、それがいい！」
「うん～、教室に猫ちゃん～、思わずはにゃ～んってなっちゃいそうで、いいよねぇ～！」

クラスメイトも徐々に盛り上がり、教室で飼ってみんなで可愛がろう、という方向で話が進んでいった。

「ふっ、そうだねぇ～。動物を可愛がる精神は大切だと、ボクも思うよ～。学級委員であるこのボクが、雪菜先生に話してみるよ～！」
「おお～、将流くん、カッコいいぞっ！　じゃ、任せたっ！」
「ふっ、ボクに、任せてくれれば、どんなことも万事オッケーだよ～！」（ふぁさっ）

将流も夢ちゃんにおだてられて、すっかりその気になっているようだ。
大げさな身振り手振りをまじえた言葉を放ちながらも、ちらちらとみるくちゃんに視線を向けている。
あんなにノリ気なのも、カッコよさをアピールするためとかなのかな？
もっともみるくちゃんの瞳は白猫のほうに釘づけで、将流のこと

なんてまったく視界に入っていなさそうだけど。

ともかく、「みんなでこの猫を飼いたい」という思いで、クラスはひとつになっていた。

3

一時間目の授業の準備をして教室に戻ってきた雪菜先生の目の前に、将流がクラスを代表して立つ。
ん？　どうしたの？　といった表情で首をかしげる先生の瞳をじっと見据えた将流は、力強い声でみんなの思いを伝えた。
そして返ってきた答えは……。

「ダメです！」

あっさりとクラスの結束は打ち砕かれた。
反対されるかもしれない、という考えは確かにあった。
でも、ここまでキッパリと否定されるなんて。

「え～～～～？　どうして～～～～～！？」

当然ながら、クラスメイトからの大ブーイングが巻き起こる。
そんな生徒たちの様子を見て、雪菜先生は困ったような表情を浮かべていた。

「こんなに可愛いのに～～～～！」
「先生だって、可愛いって思うでしょ～？」
「首輪もしてないから、きっとノラ猫か捨て猫なんだよ～！　もし捨て猫だったら、かわいそうだよね～？」
「猫ちゃんひとりじゃ、生きていけないかも～！」
「ちゃんとお世話するから、雪菜先生、お願い～～～～！」

飛びかかってきそうなほどの勢いで必死にお願いするみんなを、雪菜先生はおろおろとしながら見つめ返している。

いつもの先生の様子から考えると、面倒だからとか、そんな理由で拒否したりしそうではあるけど。
でも、今の雪菜先生の様子を見る限り、どうやらそういったつもりでダメと言ったわけではなさそうだ。
懇願する生徒たちの声が少し静まるまで待ったあと、先生は遠慮がちに口を開いた。

「みんなの気持ちはわかったし、動物を可愛がる心っていうのも大切だと思うわ。教育上の観点から見ても、本来なら許可してあげるべきだとは思うの。……でもね、本当にごめんなさい」

頭を下げる雪菜先生の瞳には、うっすらと涙まで浮かんでいた。

「わたし、猫とか犬とか、動物の毛ってダメなの。アレルギーでくしゃみとかがひどく……、はっ……、くしゅん！　くしゅん！　あう、意識したら、もう出てきちゃった……。くしゅん！　くしゅん！」

そう言った雪菜先生は、口もとに手を当て、くしゃみを連発し始めた。
もちろんそれは演技なんかではなく、くしゃみは次から次へと湧き上がるように繰り返され、本当に止められないようだった。

さっきの白い猫ちゃんは今、教室の後ろにあるロッカーの上にお行儀よく座っている状態。
先生は教室の前にある教壇に立っているわけだから、丸々教室ひとつ分離れているにもかかわらず、こんなにひどいなんて。
あまりのひどさに、見ていて痛々しいほどだった。
化粧も鼻水なんかでぐしゃぐしゃになっちゃってるみたいだし……。

「だから、くしゅん！　ほんと、ごめんなさいね、くしゅん！　わたしだって、くしゅん！　猫とか、可愛いとは、くしゅん！　思うんだけど、くしゅん！　でも……、くしゅん！」
「も……もういいですよ、雪菜先生！　わかりました！　とりあえず、廊下に出て待っててください。理科の授業、河原に行くんですよね？」

さすがに見かねたぼくは、こう言って先生の背中を押す。
クラスのみんなも同じ思いだったんだろう、誰も異論を挟んできたりはしなかった。

「あうう、くしゅん！　ごめんね～……」

完全な涙目になりながら、雪菜先生は廊下へと出ていく。

「ごめんね、ちょっと職員室に戻ってお化粧を直してから行くことにするわ……。みんなは準備が出来たら、靴を履いて昇降口の前で待っててね」

そう言い残すと、雪菜先生は教室のドアを閉め、廊下を歩いていった。
残されたぼくたちは、さっきまで猫を飼わせてと騒いでいたのが嘘のように静まり返っていた。

「……ま、仕方がないね～。とりあえず授業だし今はこのままにしておいて、戻ってきてもまだ教室にいるようだったら、この猫は学校の外に逃がしてあげよう～」

学級委員としての責任感からか、沈黙に耐えられなかったのか、

将流が場をまとめるようにそう言った。

「……そうだね。飼えないのは残念だけど、それしかなさそう」

「うん、先生ほんとに、つらそうだったもんねっ」

みんな、黙って頷く。

「よし、それじゃあ、おれたちも準備して外に出るか！」

「うん！　もっとも河原に行ったら、雪菜先生は寝っ転がって、だらだらするんだろうけど」

「にゃはははっ！　でも、外で授業するのは、楽しくていいよっ！」

「天気もいいし、清々しい気分になれそうだよねぇ～」（ふぁさっ）

「猫ちゃん～、それじゃあ、行ってくるねぇ～！」

というわけでぼくたちは、白い猫ちゃんをその場に残し、慌ただしく教室から出ていった。

4

勝手に逃げちゃってもいいと考えていたから、教室のドアを少し開けたまま河原へと向かったのだけど。

授業が終わって帰ってきたぼくたちを、白い猫ちゃんの綺麗な青い瞳が出迎えてくれた。

「あちゃ～、やっぱり出ていってないね～っ！　う～ん、困った困った！」

夢ちゃんが言葉とは裏腹に全然困っていなさそうな笑顔を浮かべながら言う。

「そうだねぇ～。ぼくのいるこのクラスの居心地が、とってもいいのかもしれないねぇ～！」（ふぁさっ）

将流もいつもの軽い笑い声を上げる。

「はっはっは！　とはいえ、このままじゃマズいだろ。雪菜先生が来るまでに、外に連れ出さないとな！」

そんなふたりに、拳志郎がやっぱり笑いながらではあったけど、冷静な指摘をする。

「うん、そうだよね」

ぼくもそれに同意する。

「だけど～、猫ちゃん、かわいそう～……」

そしてみるくちゃんが、今にも泣き出してしまいそうな弱々しい声をこぼす。
と、そんなぼくたちのもとに、騒がしい嵐のような物体が飛び込んできた。
「ちょっと、あたしの可愛いみるくを泣かしたのは、いったい誰よ！？」
鬼の形相でツバを飛ばしながら怒鳴り散らしているのは、みるくちゃんの双子の姉であるいちごだった。
毎時間毎時間、よくもまぁ、こうやって人のクラスに遊びに来るものだ。
みるくちゃんは、思わず守ってあげなきゃって気にさせる雰囲気を漂わせているから、いちごが心配になるのもわからなくはないのだけど。
「はっはっは！　べつにおれたちが泣かせたってわけじゃ、ないんだがな！」
「あんたの言うことなんて、信じられないわ！　みるく、ほんとに泣かされたんじゃないの？」
「う……うん～。そうだよぉ～。お姉ちゃんはいっつも、早合点するんだからぁ～。しっかりしなきゃ、ダメだぞぉ～？」
「うぐあっ、あんたにしっかりしろとか言われるなんて！　納得がいかないわ！」
「そ……それって、どういう意味ぃ～？」
なんというか、心配しいてるのは確かだろうけど、いちご本人もみるくちゃんに対して結構失礼なことを言ったりするんだよね、いつもいつも。

「べつに深い意味はないわよ！　というかみるく、あんたそれじゃ、どうして泣きそうな声出してたのよ？」

首をかしげてハテナマークを浮かべていたみるくちゃんを軽〜く受け流すと、いちごは逆に質問で返す。

「え〜？　んっとねぇ、この猫ちゃんがねぇ〜、かわいそうでぇ〜、そんでねぇ〜……」

のんびりとした口調で答えるみるくちゃんの言葉を遮るように、ぼくは口を挟むことにした。

もちろん、白猫ちゃんの件を簡潔に伝えるためだ。みるくちゃんに任せてたら、説明するだけで休み時間が終わってしまう。

ぼくたちには、この休み時間のうちに猫ちゃんを学校の外まで逃がさなきゃいけないという使命があるし。

というわけでぼくは、朝の会が終わったあとの教室にこの白い猫ちゃんが入ってきたこと、可愛いし首輪もついてないから、みんなで飼おうという話になったこと、でも雪菜先生にお願いしたら猫の毛アレルギーらしくダメだと言われたこと、そしてこれからこの猫ちゃんを学校の外まで逃がしにいくことを、いちごに話した。

ときおり相づちを打ちながら、いちごは真剣な表情でぼくの言葉を聞いてくれた。

「そっか。よくわかったわ。ってか、あんたたち、おバカ？　もう休み時間半分過ぎちゃってるじゃないの。早く連れていかないと！」

もっともな意見だった。

「ふっ、ボクたちが教室を出ようとしたところに、キミが来てしまったから、こんなに時間がかかってしまった、とも考えられるんじゃないかなぁ～？」（ふぁさっ）
「ほほ～。すると、なに？　あたしが悪いとでも言うわけ？」

余計なことを言い放つ将流に、睨みつけるような視線を返すいちご。まさに一触即発といった様子で火花を散らしていた。

「っていちご！　そんなことやってるから、時間がなくなるんだってば！」
「なんですって！？」

一応ぼくのほうが正論だとは思うんだけど、いちごの怒りの矛先はこちらに向いてしまったようで。
ああ、もう、こんなんじゃ、猫ちゃんを連れていけないじゃん。
なんて思ったところで、助け舟が出された。

「は～い、そこまでっ！　いちごも、将流くんも、降人くんも、そこまでそこまで～っ！　ニャンコも呆れ顔で見てるぞっ！　ほらほら、早く出発するよっ！」

いつの間にか猫ちゃんを両手で抱き上げていた夢ちゃんが、一瞬でその場を取りまとめる。
若干電波な女の子なんて言われている、ちょっと変わった部分のある夢ちゃんだけど、いつも絶妙なタイミングで鋭い発言とかをする。
ぼくたちのグループの中で一番頼りになるのは、実は夢ちゃんなのかもしれない。

☆☆☆☆☆

ともかく、いちごがどうにか気を落ち着かせたところで、ぼくたちは素早く教室をあとにした。
ぼく、拳志郎、将流、夢ちゃん、みるくちゃん、そしていちごの六人で下駄箱まで歩き、昇降口を通って外に出る。

そう、ぼくたちのクラスに迷い込んできた猫を逃がすためなのに、いちごも一緒に来ていたのだ。
授業の開始までに間に合わなかったとしても、ぼくたちは言い訳できるけど、いちごは理由にならないだろうに。

「大丈夫よ。あたしはこれでも、真面目な生徒で通ってるのよ？少しくらい遅れたからって、目くじら立てて叱られたりなんてしないわ」

そんなふうに言われると、妙に納得してしまう。
すごくケンカっ早くて、口調も高圧的だったりするのに、実際のところ、いちごはすごく真面目なのだ。

拳志郎が、「ああいうのを、ツンデレっていうんだぞ。最高だろ？」なんて言ってたけど、ぼくにはいまいち、よくわかっていない。
ツンデレって確か、普段はツンケンしているのに、好きな人の前とかだとデレッとなる感じだよね？
でもぼくは、いちごがツンケンしているのはよく見てる、というかいつも見ているけど、デレッとしているところなんて、まったく見た記憶がないのだから。

……拳志郎は見たことあるのかな……？

そんなことを考えているうちに、ぼくたちは裏門付近まで到達していた。

わざわざ裏門まで来たのは、正門の前は少し広い道になっていて車の通りも結構あるし、猫ちゃんを逃がすにはさすがに危険だろうと判断したからだ。

「う～、でもぉ～。ほんとにこのまま逃がしちゃうのぉ～？　猫ちゃん、大丈夫かなぁ～？」

「う～ん……、だけど、本能ってやつがあるわけだから、きっと大丈夫だよっ！」

「そうだねぇ～。本来猫ってのは、肉食の獣なわけだしねぇ～。闘争本能とか、生存本能とかだって、充分強いと言えるんじゃないかなぁ～？」（ふぁさっ）

「はっはっは！　確かに夜中とか、争い合ってる猫の声なんかが聞こえてきたりもするよな！」

「ふぇ～。夜中はぐっすりだから、あたちはよくわからないけどぉ～。でもぉ～、やっぱり心配だよぉ～。車にひかれちゃったりしないかなぁ～？　通りがかりの悪い人にいじめられちゃったりしないかなぁ～？　ご飯にありつけなくて、おなかすかせちゃったりしないかなぁ～？」

みるくちゃんはこの猫ちゃんのことを、すごく心配しているみたいだ。

「大丈夫だとは思うけど……、でも、絶対とは言いきれないよね……」

ぼくの声に、さっきまで逃がすことに反対なんてしていなかった

夢ちゃん、拳志郎、将流もうつむいてしまう。
微かな風の音だけが響く中、ぼくたちはただ黙って立ち尽くしていた。
その静寂を打ち破ったのは、いちごのひと言だった。
「そんなに心配ならいっそのこと、あたしたちで飼っちゃわない？
もちろん内緒でさ！」

5

「へ～、きちんと座ってるじゃないの」
「うん～。逃げたりもしないのぉ～。おりこうさんだよねぇ～」

裏庭の奥にある一角で、いちごとみるくちゃんの双子姉妹がほのぼのとした会話を響かせる。
ふたりの目の前には、あの白い猫ちゃんが、たたんで置かれたタオルの上にちょこんと座っていた。

ぼくたちは、猫ちゃんを自分たちで飼おうと決めた。
でも、ゆっくりしてもいられなかった。休み時間はすぐに終わってしまうからだ。

裏庭にあるウサギ小屋の横に植え込みがあって、小屋と植え込みのすき間部分なら、ちょうど周囲から隠れて見えなくなる。
そのことに気づいたぼくたちは、とりあえず猫ちゃんをそのすき間に残して教室へと駆け戻った。

さすがに逃げられちゃうかもしれないな。
そう思っていたけど、次の休み時間に戻ってきたぼくたちは、猫ちゃんの澄んだ青い瞳に迎えられた。

夢ちゃんが持っていたタオルを提供してくれて、それを地面に敷き、その上に猫ちゃんを座らせたところで、クラスの違ういちごも駆けつけてきた。
そして今、ぼくたちはこうして、猫ちゃんを温かな目で見つめている。

この場所で飼うことに決めたのは、やっぱりみんなで世話をしたいから、というのもあった。
もっとも、無類の猫好きであるぼくと夢ちゃんは、できることなら自分の家で飼いたいと思っていたのだけど。
ぼくの家はお母さんが動物嫌いだし、夢ちゃんの家はペット不可のアパートだから、願いが叶うことはなかったのだ。

「ほんと、綺麗な白い毛だよね～っ！　う～、わたしだけのものにしたいよっ！」

夢ちゃんがぎゅっと白猫を抱きしめる。
ちょっと強く抱きしめすぎたのか、微妙に猫ちゃんはジタバタともがいているように見えた。

「でもさ、ノラ猫にしては綺麗すぎると思うし、もしかしたらやっぱり飼い猫だったりするんじゃない？」
「えぇ～？　そうなのかなぁ～？」

いちごの冷静な声に、みるくちゃんは明らかに不満そうな顔をする。
せっかくみんなで飼おうと決めた矢先に、その気持ちを冷ましてしまうようないちごの発言は、さすがにちょっと空気が読めていなかったと言えるだろう。
ＫＹ王子の異名を持つぼくがそう思うくらいだから、それは相当なものだ。
……言っててちょっと悲しくなってくるのは、どうしてだろうか……。

「はっはっは、でもま、もし飼い猫だったら、これだけ綺麗だし、きっと金持ちの家で飼われてたはずだよな。そんな金持ちの飼い猫

がいなくなったら、写真つきのビラとかを大量に貼って探したりするだろ。そういうのもなさそうだし、大丈夫じゃないか？」
「ふっ、そうだねぇ～。それに必死に探しているようなら、学校にだって連絡が入るはずだよ～。もしそうなったら、ちゃんと返してあげればいいのさ～」（ふぁさっ）

拳志郎と将流が続けてそう意見を述べる。
ちょっと自分勝手な解釈かもしれないけど、でもぼくとしても、そう思っていた。

「うん、そうだね。そうなってもいいように、ぼくたちはしっかりとお世話してあげればいいんだよ」
「そうだよねっ！　よぉ～っし！　全身全霊を込めて、わたしはニャンコをお世話しちゃうよ～っ！」

ぼくの言葉に、夢ちゃんも肯定の意思を重ねてくれた。

☆☆☆☆☆

昼休みになり、ぼくたちは給食の残りを持ち寄って、また猫ちゃんのもとへと集まっていた。

「きゃ～、食べてる食べてる～っ！　超ラブリ～っ！　わたしがニャンコを食べちゃいたいくらいだよ～っ！」

小さい子猫ってわけではないからか結構なんでも食べるようで、持ってきた給食の残りを、猫ちゃんは好き嫌いなくたいらげていった。

そんな様子を見た夢ちゃんはさっきから、鼻息を荒くしながら興奮気味の言葉を並べ続けている。

う～ん……。確かに電波とか言われるのもわかるほど、夢ちゃんは周囲の目を気にしなさすぎかもしれない。

てゆーか、食べちゃいたいとか言いながら鼻息を荒くしヨダレを垂らして猫ちゃんを見ているなんて、女の子としてどうなのだろう？

ま、猫好きのぼくとしては、その気持ちもわからなくはない。というより、似たような気持ちではあるのだけど。

ぼくが自分の気持ちをどうにか抑えることができているのは、こうして夢ちゃんのちょっとアレな状態を見ているからなのかもしれないな。

と、それはともかく。

「ねぇ、猫ちゃんって呼ぶのは、さすがにもうやめない？　あたしたちで、名前つけちゃおうよ！」

「おっ、そうだな！　それがいい！　おれたちで、いい名前を考えよう！」

いちごからの提案を聞いて、拳志郎を筆頭に、みんなが一斉に沸き立つ。

「うん、そうだねっ！　ニャンコも、決めてほしいよねっ！？」

もちろん夢ちゃんもはしゃいだ声を上げ、猫ちゃんに向けてそう問いかけていた。

「ミュー！」

問いかけられた猫ちゃんのほうも、もちろん、と言っているかのように、明るい鳴き声を返す。

「あっ！　ビビッときたっ！　この子はミューちゃんだよっ！」
「あははは！　安直ね～！　でも、可愛いし、いいんじゃない？」
「うん～、あたちもいいと思うよぉ～」
「ミュー、ミュー！」
「はっはっは、本人も嬉しそうに鳴いてるぞ！　こりゃ、決まりだな！」
「本人っていうか、本猫？」
「細かいことは気にしちゃいけないよ～。でもま、この子の名前はミューちゃんで決まりだねぇ～！」（ふぁさっ）

猫ちゃんはこうして「ミュー」と名づけられ、ぼくたち六人の心もひとつになっていた。

ミューちゃんの存在は、雪菜先生には秘密だ。
それだけじゃなく、他のクラスメイトにも秘密にしておくことにした。
つまり、ぼくたち六人だけの秘密。
こういうのって、なんとなく楽しいよね。

「ふふっ」

ぼくは思わず、笑みをこぼしていた。

「うおっ！　降人、おまえ、いきなり笑うなよ！　気持ち悪りぃな！」
「むっ、ひどいなぁ！　でも、そういう拳志郎だって、それにみんなだって、笑顔になってるじゃんか！」

「あははは、そうね！」

ぼくが拳志郎に反論すると、いちごがミューちゃんの肉球をぷにぷにともてあそびながら肯定してくれた。

「でもぉ～、ミューちゃん、ほんとに大丈夫かなぁ～？　ここで寒くないかなぁ～？　あたちたちだけでお世話して、病気になったりしないかなぁ～？　見つかっていじめられたりしないかなぁ～？　それから、それからぁ～……」

みるくちゃんは心配性らしく、笑顔を引っ込めて弱々しい言葉を連ね始めた。

「大丈夫よ。あたしたちで、しっかり守ってあげればいいの！」

そんな双子の妹を慰めるように、いちごは明るい声を返す。

「うん、そうだね！　肉球の平和は、ぼくたちが守る！」

今度はぼくが、肯定の言葉を添える。ぎゅっと、こぶしを握りしめながら。

「あはははは！　なによ、それ～！」
「にゃはははっ！　でも、いいっ！　いいよそれっ！」
「はっはっは！　肉球防衛隊って感じだな！」
「あっ、なんかカッコいいかも！」

『あはははははは！』

裏庭の奥にあるちょっと静かな片隅に、ぼくたちの笑い声がこだ

まする。

こうして、ミューちゃんを守るための秘密組織、『肉球防衛隊』が結成されたのだった。

6

ガサゴソ。
ぼくは今、自分の家の冷蔵庫をあさっていた。
あっ、お刺身が買ってある。……よし、赤味をひと切れ、持っていこう。

あのあと、ぼくたちは話し合った。
みんなで給食を少しずつ残して食べさせるだけじゃ、ミューちゃんのエサとしては足りないだろう。
じゃあ、どうしようか？
というわけで、放課後と朝にも、家からなにか持ってくることになったのだ。

食べ物類を家から毎日持ってくると、さすがに親に見つかって問題になるかもしれない。だから、順番を決めて交代で持ってくることに決めていた。
提案したぼくから順にという話になったため、放課後になって一旦家に帰ったぼくは、こうして冷蔵庫を物色しているのだった。

と突然、その背後に人影が忍び寄る。

「降人、なにやってるのさ？」
「うわあっ！？」

あまりに大げさな声を上げて振り返ったものだから、声をかけた本人のほうも目を丸くして驚いているようだ。

「ね……姉ちゃんか、びっくりした……」

そう、それはぼくの姉ちゃん、猫宮羽浮（ねこみやはーぷ）だった。
羽浮姉ちゃんは、ふたつ年上の中学二年生。
いつも明るく元気なところは、なんとなく夢ちゃんと似ていなくもない。

ただ、これも夢ちゃんみたいと言えなくもないけど、微妙にずれている感じだから、姉としての威厳はないと言っていいだろう。
さらにはなんというか、色気もまったくないというか、胸なんてペッタンコで……。
お父さんに似たのか、ぼくよりも背は高いのだけど、女性らしさは皆無なのだ。
もっとも、お母さんに似てしまって背の低いぼくも、あまり男らしい感じとは言えないわけだけど。

どっちにしても、姉ちゃんがモデルさんみたいに女性らしい雰囲気だったとして、弟から見たらべつになんとも思わないのが普通かもしれない。
とすると、ぼくはこうして色気のない姉ちゃんだと思っているけど、他の男性から見たら、すごく魅力的ってこともあるのかも……。

……う〜ん……、それは、絶対にありえないな……。
ぼくはそう結論づける。

「びっくりしたのはこっちのほうだってのさ！　まったくもう〜！
……ていうか、あんた今、失礼なこと考えてなかった？」
「え？　べ……べつになにも考えてないってば！」

姉ちゃん、あなたはエスパーですか？

「ま、それはいいわ。それで？　いったい、なにしてんのさ？」
「いや、その、べ、べつに、なんでもないよ！」
思いっきり焦りまくりながらも、ぼくはどうにかごまかそうと必死になる。
いくら姉としての威厳はないと言いきっていても、二歳年上の姉ちゃんには敵わないことも多い。もしバレてしまったら、やっぱり問題になるだろう。
「ふ～ん……？」
姉ちゃんは、あからさまに怪しいものを見るような目を向けてきた。
冷や汗がたらりと背中を伝って流れ落ちる。
見つめ合ったまま、時計の音だけが響いていた。
沈黙に耐えきれなくなったぼくは、
「あっ、それじゃぼく、急いでるから！」
と言い残し、逃げるように姉ちゃんの前から走り去っていた。

☆☆☆☆☆

急いで羽浮姉ちゃんの前から走り去ったけど、ぼくはしっかり、赤味ひと切れをゲットしていた。
手でつかんでいたから、ちょっと生温かくなっちゃってるかもしれないけど……。
とにかく、それを持ってみんなが待つ学校へと向かう。

「遅いぞ、降人！」
「ごめんごめん！　姉ちゃんに見つかりそうになって……。結局これしか、持ってこれなかったよ」
「わっ、お刺身だよっ！　豪華だねっ！」
「いやいや、たくさん入っていくら、とかで売ってるやつだから、豪華ってわけじゃ……」
「でも、ひと切れだけ？　さすがに足りなくない？」
「う……、そう言われると、返す言葉がないけど……」
「いいから～。早くミューちゃんにあげようよぉ～」
「ふっ、そうだねぇ～。ミューちゃんの可愛い食事姿を拝見したいよねぇ～」（ふぁさっ）
「文句言って悪かったわ。ともかく降人くん、早くそれ、ミューちゃんにあげちゃって」
「うん。ほらミューちゃん、お食べ！」
「ミュー！」（がじがじがじ）
「うわぁ～、かっわい～！　はにゃ～んってなっちゃう～！」
「食べてる食べてるっ！　ああ～、ヨダレが出ちゃうわっ！」
「夢、あんたってどうしてそう……。ほら、ハンカチ」
「うにゅっ。いちご、ありがとうっ！　ぱくっ！」
「うわっ！　ハンカチ食べるんじゃない！　口の周りを拭けってことよ！　ああ、もう、べちゃべちゃ！」
「へ～、猫じゃん！　やっぱりね。あんた、隠れてこんなことしてたんだ」
「うん、そう、猫……って、え！？」

突然加わったひとりの声に、ぼくは驚いて振り返った。

「やほ～、久しぶり～！　みんな今日も仲よく集まってるのね～！」
「あ～、降人くんのお姉さんだぁ～！」

みるくちゃんが、いつもどおりの間延びした声を上げる。
そう、ぼくたち六人の背後で前屈みになってのぞき込んでいたのは、楽しそうに笑顔を浮かべた羽浮姉ちゃんだった。

「わわっ！　わたしたちの秘密基地に侵入者だよっ！　これは由々しき事態だよっ！」
「むっ、夢ちゃん、侵入者呼ばわりはひどいな～！　なにを隠そう、わたしはあなたたちの味方なのさ。ほら！」
夢ちゃんの言葉に、姉ちゃんは右手に持ったビニール袋を掲げる。
そこには、何切れかのお刺身が入っていた。

☆☆☆☆☆

「降人が赤味をひと切れ持って、慌てて学校に向かったみたいだったからね。ま、だいたい予想はついたから、お刺身をもう少し持って、追いかけてきたってわけさ」
「羽浮さん、わざわざすみません」
「いえいえ、いいのよ～。相変わらずいちごちゃんは、礼儀正しいわね～」
「猫かぶってるだけだろ」
「なんですってぇ～！？」
「相変わらずみんな、仲よしみたいね～！　安心したわ！」
こうして姉ちゃんにバレてしまったぼくたちは、今までのいきさつを全部話した。

「なるほどね。わかったわ、わたしも協力する！　協力者は多いほうがいいでしょ？」

なんだか姉ちゃんはノリ気だった。

「あっ、それならおれも、南（みなみ）にミューちゃんを見せてやりたいな」

「おおっ、だったらわたしも、希望（のぞむ）に見せたいよっ！」

「いいじゃんいいじゃん、みんなで協力しちゃおう～！」

どういうわけだか、いつの間にか姉ちゃんが場を仕切って、拳志郎と夢ちゃんの言葉を受け入れていた。

ちなみに拳志郎の言う南ちゃんっていうのは彼の妹で、希望くんというのは夢ちゃんの弟だ。

確か南ちゃんは四年生で、希望くんは三年生だったかな。

「ふっ、肉球防衛隊も、徐々に規模が大きくなっていくねぇ～！」

（ふぁさっ）

前髪をかき上げながらそう言う将流の言葉に、姉ちゃんは驚くほどに食いついた。

「きゃはははは！　なにそれ～、バカっぽい名前～！　もう、最高～～～！」

おなかを抱えて大声で笑い始める姉ちゃん。

そんなふうに言われると、命名したぼくとしては恥ずかしくなってしまう。

でもすぐに姉ちゃんは、

「いいわ、年長者としてわたしが隊長になったげる！」

と言い放った。
……言い放った途端、
「きゃはははは！　隊長だって！　ヤバ、すごいバカっぽい！　ウケる～！」
涙まで流しながら、思いっきり笑い転げ始めてしまったのだけど。
そんな様子を見てぼくは思う。
羽浮姉ちゃん、あんたが一番バカっぽいよ、と。
でもそんなこと、口が裂けても言えはしないのだった。

1

「う～ん、春だってのに、今日はやけに寒いわよね」

いちごが両腕をさすりながら、そうつぶやいた。

彼女の横では、みるくちゃんがそれに同意するかのように、小さく可愛らしいクシャミをしている。

ぼくたちは最近の日課のようになっている、ミューちゃんの様子見に来ていた。

授業の合間の短い休み時間にも、ぼくたちはなるべく集まって、ミューちゃんの様子を見たり、エサをあげたり、撫でたり抱き上げたりして可愛がったり。

そうやって日々を過ごしていた。

「確かにちょっと、寒いよね」

「風が吹くと、とくにそうだねぇ～。ウサギ小屋の壁があっても、反対側からの風は防げないわけだし」（ふぁさっ）

ぼくがいちごの言葉に同意すると、将流も髪をかき上げながらそう言った。

「子供は風の子だよっ！　わたしは今日も元気いっぱいっ！　パワー充填百二十パーセントだよっ！」

「……お姉ちゃんは元気すぎる……」

元気に大声を張り上げる夢ちゃんに続いて、おとなしそうな男の子が控えめな声を添える。

夢ちゃんの弟、豹堂希望（ひょうどうのぞむ）くんだ。

羽浮姉ちゃんが勝手に隊長になって、入隊を許可したメンバーのひとり、ということになる。

もうひとりの新入隊員、拳志郎の妹の虎間南（とらまみなみ）ちゃんも、同じようにこの場所に来るようになっていた。

ちなみに羽浮姉ちゃんは中学生だから、今はこの場にいない。

「夢さんは本当に元気ですね。うちのお兄ちゃんも元気ですけど、その分、おバカですから……」

学年が上のぼくたちに囲まれて、さすがにちょっと遠慮気味な声ではあったものの、南ちゃんはそんなことを言っていた。

拳志郎の妹なのにとってもしっかり者で、まだ四年生ながらも、セミロングでストレートの黒髪が綺麗な、可愛い感じの彼女。

将流がいつも、数年後にはかなりの美人になるに違いないねぇ～、と言っている。

確かに大柄な拳志郎と似ているのは背の高さくらいだから、将流がそう言うのもよくわかるというもの。

それにしても、南ちゃんの背は、平均身長よりも結構高そうだ。

というか、チビなぼくの背の高さなんて、あっさりと抜かれていた。

将来モデルとかになったとしても、全然不思議ではないのかもしれない。

ほんとに拳志郎の妹なのだろうか。複雑な家庭の事情とかがあったりするのだろうか。

なんて疑ったこともあったけど。実際にはちゃんと血のつながった兄妹に間違いないらしい。

「はっはっは、南、なんだよそれは！　ま、確かに元気ではあるから、寒さのほうは大丈夫だけどな！　みんなも寒いなら上着を羽織ればいいだけだろ！」

その兄である拳志郎が、いつもどおりの笑い声を上げる。

確かに南ちゃんの言うとおり、こいつはいつも元気で、そしておバカだ。

「あんたは非常識なまでに丈夫な体してるから、そりゃ平気でしょうよ」

そしてそんな拳志郎に素早くツッコミを入れるのは、いちごの役割だった。

いちごもいちごで、元気だよなぁ。

「はっはっは、おまえだって、そうじゃないのか？」

「あ～、ま～、風邪はひかないわね～」

「バカは風邪をひかない……（ぼそっ）」

ふたりのおバカなかけ合いに、ぼくは思わずつぶやいていた。

「ん？　なんか言った？」

「い……いや、なにも」

もちろん、いちごに睨まれたぼくは、慌てて言葉を濁す。

実際のところ、いちごは成績優秀な上にスポーツも万能という、神様は不公平だと言わざるを得ないようなやつなのだけど。

こうして拳志郎と口論というか、言い争う姿を見ていると、どう考えても同類のおバカっぽく思えてしまう。

「でもぉ～、ミューちゃん寒くないかなぁ～？」

そんなバカげた周りの雰囲気に流されたりせず、みるくちゃんが心配そうな声をこぼす。

「ふむっ、そうかもだねっ！　子供は風の子だけど、子猫は風の子とは言わないしっ！」

それに合わせて、微妙にずれた発言をする夢ちゃん。

「ミューちゃん～、寒くな～い～？」

「ミュー……」

首をかしげて語りかけるみるくちゃんに、ミューちゃんはまるで返事をするかのように弱々しい鳴き声を上げた。

「やっぱり～、寒いんだよぉ～」

「う～ん、そうみたいだねぇ～。いくら体中に毛が生えているとはいっても、寒さを感じないわけじゃないだろうしねぇ～」（ふぁさっ）

「でも、隠れて飼ってるんだから、小屋とかを作るってわけにもいかないだろうし……」

頭を悩ませ始めるぼくたち。と、みるくちゃんが立ち上がって、こう言った。

「あたちが、ミューちゃんのお洋服を作るよぉ～！」

☆☆☆☆☆

放課後。

みるくちゃんは意気揚々と服作りに必要な布地を買うために帰っていった。

双子の姉であるいちごも、彼女についていった。きっと、みるくちゃんだけじゃ心配なのだろう。

というわけで、ぼくを含めた残されたメンバーが、ミューちゃんの前に集まっていた。

「へ～、ミューちゃんの洋服か～。楽しみだね～！」

羽浮姉ちゃんも合流して、ぼくたちはさっきの件について話し合っている。

みるくちゃんが服を作ると言ったとき、ミューちゃんは明らかに不安そうな顔をしていたように見えた。

いやまぁ、さすがに人間の言葉を猫のミューちゃんが理解しているとは思えないけど、でもなんとなく、状況は察知しているように思えたのだ。

普段のみるくちゃんの様子――失礼だけど、とってもトロい様子を見ていると、本当に大丈夫なのか、ぼくも心配だった。

さすがに本人に対してそう言うのも悪いから、小声でいちごに尋ねてみたところ、

「ん、あの子、お裁縫は得意だから、ミューちゃんの服を作ってあげて寒さをしのぐ、ってことに問題はないと思うわ」

という答えが返ってきた。

ぼくはそれを聞いて、ホッと胸を撫で下ろしていたのだけど。
「ただ、ちょっと……、ん～……。ん、なんでもない」
と続けられた言葉に、一抹の不安を感じざるを得なかった。
そしてそれは、現実のものとなる。

☆☆☆☆☆

「さ～、ミューちゃん～！　あたち、徹夜して頑張って、お洋服作ってきたよぉ～！　着てちょうだいねぇ～！」
次の日、みるくちゃんが作ってきた洋服は、鮮やかなピンク色を基調とした、ひらひらのフリルやらリボンやらの飾りがこれでもかというほどついた、可愛らしいを通り越して、ちょっと痛い感じの衣装だった。
満面の笑みでその服を着せようとするみるくちゃんに、明らかに嫌そうな顔を向け、逃げようとしている様子のミューちゃんだったけど。
異常なほど気合いの入ったみるくちゃんの魔の手から逃れるすべなんて、ミューちゃんにはなかった。
「うっわぁ～、可愛いよぉ～！　ミューちゃん、これでもう、寒くないねぇ～！」
「ミュ……ミュー……」
数分後、リボンやフリルで覆われた衣装に身を包むミューちゃんは、ぐったりと項垂れているように思えた。

きっと、ミューちゃんは思っているのだろう。
確かに体は寒くなくなったけど、こんな衣装、べつの意味で寒いよ、と。

2

「キシャーーーーーー！！」

休み時間になり、ぼくたちがいつものようにミューちゃんを隠しているウサギ小屋の横まで来ると、なにやら尋常ではない威嚇の鳴き声が聞こえてきた。

その鳴き声は、明らかにミューちゃんが発したものだ。

「なんだ！？」

ぼくたちは顔を見合わせ、ミューちゃんのもとへと急ぐ。

クラスの違ういちごや、学年も違う南ちゃんや希望くんはまだ来ていなかった。

つまり、ぼくたち同じクラスの五人が、こうして真っ先にミューちゃんのもとへ駆けつけたことになる。

その場にいたのは、ぼくたちの他には、ミューちゃんと、そしてもう一匹。

みるくちゃんが用意したフリフリのピンクの衣装を着たままだから、毛を逆立てているかはよくわからなかったけど、ミューちゃんは完全に威嚇のポーズ。

そのミューちゃんと対峙しているのは、一匹の黒い猫だった。

「わっ！　黒猫なんて、不吉だよっ！　幸せのお祈りしないとっ！」

相変わらず夢ちゃんの食いつき方は、ちょっとずれている。

幸せのお祈りって、なにさ？

「なんなんだ、この猫は！？」
「ミューちゃんのお友達かなぁ～？」
拳志郎の叫び声のごとき言葉に、みるくちゃんがいつもののんびりとした声を添える。
う～ん、みるくちゃんも、夢ちゃんに負けず劣らず、ずれてるなぁ……。
ぼくの周りって、なんだかみんな、ちょっと変わってる人ばっかりなんだよね。
……もちろんぼくは普通だけど。
「バカね！　こんなに威嚇し合ってて、友達なわけないでしょ！」
とそこへ、いちごが遅れて駆け寄ってきた。
遅れて来たとはいっても、状況を見ておおよその会話内容は察しているのだろう。
「ええ～？　でも、ケンカするほど仲がいいって言うよぉ～？」
いちごの正常なツッコミにも、そんな受け答えを返すみるくちゃん。やっぱり、ずれている。
一方のいちごは一見普通っぽく見えるけど、なにせいちごなのだ。拳志郎を打ちのめしたほどだし、女格闘家とか姐御とかってイメージがあるのだから、どう考えても普通とは言えないだろう。
「ちょっと降人くん！　あんた、なにか失礼なこと考えてるような顔してるわよ！？」
「な……ちょ、え！？　いや、べつに、ぼくは、なにも……！」
突然いちごから鋭い目つきで睨まれたぼくは、思わずどもってし

まう。
というか、羽浮姉ちゃんに続いて、いちごもエスパー！？
ぼくの周りって、どうしてこうも変な人ばっかりなんだ！？
「はっはっは、降人は思ったことがすぐ顔に出て、とてつもなくわかりやすいからなぁ！」
焦りまくっているぼくを尻目に、拳志郎はそう言って笑っていた。
そ……そうか、ぼく自身がわかりやすいだけなのか……。
謎は解けたけど、納得のいかないところではある。
とりあえず、気をつけるしかないか……。
と、今はそんなことを考えてる場合じゃないや。
「キシャーーーーーー！！」
「シャーーーーーーー！！」
目の前ではいまだに、ミューちゃんと黒猫が威嚇の声をぶつけ合い続けていた。
「……うわ……、大丈夫かな……？」
「ミューちゃん、すごい声出してますよね……」
そのあいだに、希望くんと南ちゃんもやってきたけど、ぼくたちのそばに着くなり思わずそんなつぶやきをもらしていた。
「とりあえずミューちゃんにとって、あの黒猫が威嚇すべき相手ってことだけは、間違いなさそうだねぇ～」（ふぁさっ）
「うん、そうだね。でも、だからといって、ぼくたちが手出しして

いいものなのかな？」
「う～ん……。猫には猫の世界のおきてとか、あるかもしれないわよね……」
将流の言うことはもっともだったけど、ぼくもいちごも、どうしたらいいか頭を悩ませていた。
と、そんな中。
すでに素早く行動を開始していた人が、ぼくたちの中にひとりだけいた。
「こら、ダメでしょっ！　同じニャンコ同士、仲よくしなくちゃっ！」
そうたしなめながら、夢ちゃんが黒猫を背後から抱きかかえる。
猫ってかなり、敏感な動物だと思うのだけど。
夢ちゃんはそんな黒猫の背後に、気づかれないうちに回り込んで、そして抱きかかえるということを、いとも簡単にやってのけたのだ。
「ミギャッ……！？」
いきなり抱きかかえられた黒猫が、驚いたような鳴き声を上げる。
ジタバタともがき暴れる黒猫だったけど、夢ちゃんの束縛から逃れることはできなかった。
う～ん、さすが夢ちゃんだ。
夢ちゃんって、可愛い動物とかが関わると、とんでもない力を発揮するんだよね。
……ま、ぼくも人のことは言えないか。
「あっ、このニャンコ、オスだよっ！」

不意に夢ちゃんはそう言うと、抱きかかえた黒猫の両足を持ち上げて、股をおっぴろげさせた。

「ミギャウッ！？」

さっきまでにも増して、ジタバタともがく黒猫だったけど、もちろん夢ちゃんの腕から抜け出せるわけもなく。

「あっ、ほんとね」

「わぁ～、可愛いねぇ～！」

「ほんとだ。小っちゃくて可愛いですね。……あっ、べつに、他意はないですよ？」

「にゃはははっ！　他意ってなによ～っ？」

なんというか、主に女子たちがとってもハイテンションではしゃぎ始めたような気がする。

「はっはっは！　まだまだ発展途上って感じだな！　おれのなんて……」

「は～い、下ネタ禁止！　猫ちゃんだったら可愛いけど、あんたたちの話なんて、可愛げがないんだから！」

拳志郎もその輪に加わろうとしたのか、なにやらおかしな方向に突き進もうとしたところを、絶妙なタイミングでいちごが止める。

このふたり、やっぱり息ピッタリだなぁ。

「む。そういうことは、実際に見てから……」

「ぎゃ～～～！　このバカ、なにしてるのよ！」

ごそごそと腰のベルトに手をかけ始めた拳志郎の顔面を、思いっきりグーで殴るいちご。
その様子を見て、拳志郎の妹である南ちゃんは思わず頭を抱えているようだった。
おバカなお兄ちゃんを持ってしまって、頭が痛いです。とでも考えているのだろう。

「はっはっは、いいパンチだったぜ！」
「アホか！　ってか寄るな触るな近づくな！　半径三メートル以内に入るんじゃない！　このお下劣野郎！」
「にゃはははっ！　拳志郎くんといちご、楽しい～っ！　……あっ！」
「ミギャッ！」

拳志郎といちごの夫婦漫才（とか言ったら殴られそうだけど）を見て大笑いし始めた夢ちゃんは、つい黒猫を抱きかかえていた腕の力を緩めてしまったのだろう。
ここぞとばかりに気合いの鳴き声を上げた黒猫は、するりと夢ちゃんの腕をすり抜け、そのまま裏門のほうへと一目散に逃げていってしまった。

「ああ～～～っ、わたしの黒ニャンコちゃんがっ！」
「あんたのじゃないでしょ！」

残念そうに叫ぶ夢ちゃんに、いちごがツッコミを入れる。

「ミュー……」

弱々しく鳴いたミューちゃんの声は、ぼくにはなんとなく、ため息のように聞こえた。

3

さっきの黒猫は、いったいなんだったのだろう？
疑問に思いながらも、ぼくたちには授業があるから、ミューちゃんをその場に残して去るしかなかった。

タイミング悪く移動教室の授業が続き、結局昼休みになるまで、ぼくたちはミューちゃんのもとへ向かうことができなかった。
移動教室の授業じゃなかった、別のクラスのいちごや南ちゃん、希望くんに行ってもらうように話はつけてあったけど、ぼくたちと会う時間はないから状況も聞けない。

ミューちゃんは、大丈夫だろうか？
またあの黒猫が来て、ひどいことになっていたりはしないだろうか？
ぼくはなんだか悪い予感がして、心配で心配でたまらなかった。

「ま、きっと大丈夫だ。いちごが様子を見に行ってくれてるんだから。な？」

そう言って、拳志郎はぼくを落ち着かせようとしてくれたけど。
実際、心配したって今のぼくにはどうしようもない。それは自分でもよくわかっている。
だけど、それでもどういうわけか、嫌な予感は膨れ上がるばかり。

昼休みになっても、給食を食べ終わるまでは教室を出てはいけないことになっている。
だからぼくは大急ぎで給食をたいらげ、というよりも、ミューちゃんにあげる分をいつもより多めに隠し持って、勢いよく教室を飛

び出した。

「あら、猫宮くん、もう食べ終わったの？」

雪菜先生が驚きの声を上げているのは聞こえてきたけど、ぼくは止まることなく廊下を走る。

「こら、廊下は走っちゃダメよ～……」

と叫んでいる先生の声は、すぐに聞こえなくなった。ぼくはすでに曲がり角を曲がり、下駄箱に到達していたからだ。

素早く靴に履き替え、そのまま中庭を通ってウサギ小屋の横へと向かう。

そこにはまだ、ぼく以外の人は誰も来ていなかった。

ただ、別の招かれざる客が、ミューちゃんを取り囲んでいた。

「ミュー……」

困ったように弱々しく鳴くミューちゃんと、その周りを取り囲む、たくさんのウサギたち。

そう、それはウサギ小屋の中で飼われているはずのウサギたちだった。

何種類かのウサギがいるらしく、灰色だったり、白かったり、黒と白のまだら模様だったり。

様々なウサギたちが今、ミューちゃんを取り囲んでいた。

そしてそのウサギたちは徐々に、ミューちゃんへとにじり寄っていく。

まさにそんな場面に、ぼくは到着したのだ。

「わっ！？　なんでウサギが？　って、そんなこと考えてる場合じゃない！」

ぼくは大きく足音を響かせながら、ミューちゃんのそばに駆け寄る。

「こら～、ミューちゃんから離れろ～！」

ぼくの大声と足音に気づいたからだろう、一斉にウサギたちがこちらに目を向け、逃げるようにミューちゃんのそばから散っていった。

「ミュー！」

ミューちゃんがあたかも、助かりました、とでも言うように鳴き声を上げながら、ぼくにすり寄ってくる。

「大丈夫だった？」

「ミュー、ミュー！」

ぼくの問いかけに、ミューちゃんは返事をしてくれているように、ミューミューと鳴き続けていた。

「ちょっと、降人くん、どうしたの！？　って、なによこれ！？　ウサギが……！」

そんなぼくとミューちゃんのもとへ、いちごが駆けつける。

「降人、大丈夫か？」

「ふっ、なんだか、大変なことになってるみたいだねぇ～」（ふぁさっ）
「うわわわっ！　ウサちゃんたちが、大変っぽいかもっ！？　これは由々しき事態だよっ！」

さらに同じクラスの三人も、続々と向かってきた。

その中にみるくちゃんの姿はない。ちょっとトロい彼女は、給食を食べ終えるのにも時間がかかるからだ。
ぼくが急いで教室を出たことを知って、他のみんなと同様、すぐに追いかけたいとは思っただろう。
でも、一部をこっそりとビニール袋とかに入れてごまかすとか、そんな裏技的なことを、みるくちゃんが実行に移せるわけはないのだ。
というか、そもそもそんなこと、思いつきもしないだろう。
昼休みが終わるくらいに現れて、「ごめんねぇ～、あたち、トロくてぇ～」と涙目になりながら謝ってきそうな気がする。

と、今はそれよりも、目の前の状況をどうにかしないと。

確かにミューちゃんの危機は去ったと言える。
でも、逃げ出したウサギたちをどうにかしないと、状況を考えて、ぼくたちが悪者にされてしまうに違いない。

ウサギ小屋を見てみると、カギをかけて閉められているはずのドアが開け放たれていた。
周囲にはぼくたち以外に誰もいない。ということは、ぼくたちが犯人だと疑われてしまう可能性が高い。
もちろんぼくたちは犯人じゃないけど、そんな言い訳が通じるかどうかわからないし。

「ミュー……」

ごめんなさいね……。

弱々しく鳴くミューちゃんは、そう謝罪しているようにすら見えた。

「あ……、服になにかが……」

よく見ると、ミューちゃんに着せてある服の中に、野菜や牧草の切れ端なんかが引っかかっていた。

いや、引っかかっていたというよりも、故意に入れられたとしか思えないような感じだ。

ふとウサギ小屋に目を向ける。

小屋の中でいつもエサが置かれている場所を見てみると、そこにはなにも置かれてはいなかった。

給食の時間より前にウサギのエサを用意しておくことになってるはずだから、おそらく三時間目の休み時間にはウサギ当番の人がエサを置いていたはずだ。

犯人はどうやってかカギを手に入れてドアを開け、そしてウサギのエサを持ち出してミューちゃんの服の中に入れた。

きっとミューちゃんは、植え込みと壁のあいだに敷いてあるタオルの上で眠っていたのだろう。猫は一日の三分の二くらいは寝ているというし。

そして、ドアが開け放たれたままだったせいで、おなかをすかせたウサギたちは小屋から出てきて、エサのにおいを嗅ぎつけ、ミューちゃんを取り囲んでいた。

おそらく、そういうことだったのだろう。

「これは、誰かがミューちゃんをいじめてるってこと……？」

ぼくは思考を巡らせ、小さくつぶやく。

と、そんなぼくを現実に引き戻す声が響いた。

「降人くんっ！　それより、こっちを手伝ってほしいんだけどっ！
ウサちゃんたち、捕まえて小屋に戻さないとっ！」

夢ちゃんが悲痛な叫び声を上げる。

彼女だけではなく、拳志郎も将流もいちごも、あとから来ていたらしい南ちゃんや希望くんも、逃げたウサギを捕まえるために走り回っていた。

どうやらみるくちゃんだけは、まだ来ていないみたいだったけど。

「あっ、そうだね、ごめん！」

ぼくは急いでミューちゃんをタオルの上に戻し、逃げ惑うウサギたちの捕獲部隊に加わった。

4

「みなさん、今日は少しお話があります」

帰りの会になると、普段は見せないような真面目な顔をした雪菜先生が、生徒たちをじっと見据えながらこう切り出した。

ざわざわざわ。みんな、にわかにざわめき始める。

「あの雪菜先生が、真面目な顔して帰りの会を始めたぞ！？」

「そんなバカな！？　いつもなら『今日は連絡事項なし～、以上終わりっ！』で終了するのに！」

「なんだか、嫌な予感がするよっ！　もしかして、お説教っ！？教師の専売特許、クラス全員連帯責任が発動しちゃうのっ！？」

などなど、みんな口々に好き勝手なことを言い始めていた。

その中には、やっぱりと言うべきか、夢ちゃんもまじっていたわけだけど。

大騒ぎとかになったら、まっ先に加わっていく性格だもんなぁ、夢ちゃんは。

と、そんなクラスメイトたちのざわめきを、雪菜先生が大声で一喝する。

「静かにっ！　まずは先生の話を聞きなさい！」

バンッ！

大声に加え、黒板を平手で叩いて、喧騒を静める雪菜先生。

いつもは生徒たちから軽視されている感すらある雪菜先生だけど、さすがに教師としての威厳はあるらしい。

一瞬にしてシーンと静まり返る六年二組の教室。
満足そうに軽く唇の端をつり上げると、雪菜先生はぼくたちに向かって話し始めた。
「どうもこの学校に、隠れて猫を飼っている生徒がいるらしい、という噂が今、先生方のあいだで話題になっています」
ざわ……。
一瞬ざわめきが広がりそうになるものの、また怒られると思ったからだろうか、すぐにその声は静まった。
静まったとはいっても、そこかしこで、ひそひそと話しているような声は聞こえる。
そしてぼくは、思わず身を固くしていた。
隠れて猫を飼っている生徒――。
それは紛れもなく、ぼくたちのことだ。
ミューちゃんのことは、このクラスだと、ぼくと拳志郎、将流、夢ちゃん、みるくちゃんの五人以外は知らないはずだけど。
それでもクラスメイトの中には、なんとなく感づいている人もいるかもしれない。
だからこそ、周りでみんながひそひそと話している。そういうふうにも考えられた。
確かにぼくたちは、先生や他の人に秘密にしようと考えながらも、警戒を怠っていた気がする。
職員室からは見えない陰になる場所だからと思って、安心しすぎていたのだ。
「あなたたち、なにか知らない？」

優しく諭すような声で、雪菜先生は質問を投げかけてくる。
クラスのみんなは、お互いに顔を見合わせるけど、先生に答えを返す人はいなかった。

でも……完全に無視するのも、不自然かな……？
ぼくは不意にそう考え、意見を述べる。

「し……知らないです！」

思わずどもり気味になってしまい、余計に怪しさを増していたかもしれないけど。
ふと視界に入った将流は、頭を左右に振り、呆れを含んだため息をついているようだった。

ううう、ぼくって演技には向かないタイプの人間みたいだ……。
薄々気づいてはいたけどさ……。
微かなざわめきが教室内を漂う中、雪菜先生はひとしきり他の生徒たちにも視線を巡らせると、再び口を開いた。

「そう、誰も知らないのね」

ひと言だけ、つぶやく。

だけど雪菜先生は、先日ぼくたちが猫を飼いたいと言っていたことを知っている。
とすると、このクラスの誰かが隠れてあのときの白猫を飼っているのではないか、と考えていてもおかしくない。
ある程度疑いを持っていると思っておいたほうがいいのかもしれない。

ぼくはそう考えながら、雪菜先生の様子をうかがっていた。

「子供たちだけで世話をするって、大変だものね。もし自分たちのせいで猫ちゃんが死んでしまったら、あなたたちも悲しいでしょ？」

よりいっそうの優しさを含んだ声音で、雪菜先生は語りかける。

……これって……やっぱり先生、ぼくたちの中に猫を飼っている人がいることに、気づいてる……？

普段から適当さが目立つ先生ではあるけど、生徒たちの気持ちをしっかりと理解してくれているのは確かだろう。

だとすると、きっとこのクラスの誰かが……いや、もしかしたらぼくたちのグループが噂されている生徒だとまで、わかっているのかもしれない。

「前にも言ったけど、動物の世話をすること自体は、教育の上でも大切だと思うわ。だから、もしそういうことをしている生徒がいたとしても、先生は咎めたりなんてしません。でも、ひと言、相談してほしいな」

雪菜先生の言葉に、クラスの誰も、声を発することができなかった。

教室全体を見回した先生。

その瞳は、不自然に固くなりながらうつむいている、ぼくたちのグループ五人を、順に捉えているように思えた。

「……お話は以上です。今回の件だけじゃなくて、いつでも先生を頼ってくれていいんだからね。教師っていうのは勉強を教えるだけの存在じゃないのよ」

終始優しい声で話し続けた雪菜先生は、帰りの会を締めくくる。
そして、
「それじゃあ、帰りの会を終わります。みんな、気をつけて帰るのよ！」
おそらく意識的に明るく声を弾ませながら、先生はそうつけ加えた。

☆☆☆☆☆

ぼくたち五人、いつもの面々は、ちょっと沈んだ顔でとぼとぼと廊下を歩いていた。
目指すはもちろん、ミューちゃんのいるいつもの場所だけど。
誰もなにも喋ることなく、ただ黙って歩くだけだった。
いつでも元気が取り得の夢ちゃんでさえ、雰囲気に呑まれているのか、ひと言も口にしない。
「あれ？　あんたたち、そんな暗い顔して、いったいどうしたってのよ？」
不意に背後から声がかかった。
その喋り方から振り向くまでもなくわかる声の主は、もちろんいちごだ。
いちごのいる六年五組は、ぼくたちの教室よりもさらに下駄箱から遠い位置にある。
もっとも帰りの会の長さは日によってまちまちだし、必ずいちご

があとから来るとは限らないのだけど。
ともかく、そんないちごの呼びかけにも、ぼくたちは生返事を返すばかりだった。
「ん～？　なによなによ。あんたたちらしくないわね～。そんなんじゃ、ミューちゃんに笑われちゃうぞ？」
ぼくたちの様子を心配してくれたんだろう、いちごは普段以上に明るい笑い声を上げながら、五人の肩を次々と叩いていく。
「ん……そうだよね。べつにぼくたち、やましいことをしてるわけじゃないんだし」
「そうさ～。ちょっと自己満足というか、自分勝手なのかもしれないけど、でもボクたちは正しいと思うことをしているんだ。胸を張っていいはずだよ～」（ふぁさっ）
「はっはっは、そうだな！　だいたいおれたちが弱気になってちゃ、ミューちゃんを守ることなんてできないよな！」
「うん～。そうだよねぇ～。お姉ちゃん、ありがとう～」
ぼくたち四人は、いちごの言葉に素直な思いを吐き出す。
そう、四人……。
いつもなら底抜けに明るい夢ちゃんだけが、今でもまだ沈んだ表情のまま、廊下にたたずんでいた。
「ちょっと、夢。あんた、どうしちゃったの？　いつもみたいにさ、真っ先に笑ってくれなきゃ！　夢の笑顔がないと、みんな寂しいんだからさ！」
いちごはなおも気遣いの声を夢ちゃんに向ける。

「はっはっは、おまえ、よくそんなセリフを恥ずかしげもなく言えるな！」
「な……！？　あ……あたしはべつに、正直に思ったことを……！
っていうか、拳志郎、あんたうるさいっての！」

ゲシッ！
手よりも先に足が出るいちごだった。

「はっはっは、いいキックだ！　だが……みぞおちは……反則だ……」

バターン！
拳志郎はおなかを抱えたままスローモーションで豪快に倒れたかと思うと、そのまま体を反転させて大の字に寝転んだ。

「って、拳志郎〜〜〜〜！」
「うわっ！？　あたし、やりすぎちゃった？　ごめん、拳志郎、大丈夫！？」

ぼくが駆け寄るより早く、いちごが倒れた拳志郎を抱き上げる。

「はっはっは、背中に感じる微かな胸のふくらみが、とってもグーだ！」
「な……っ！？　いっぺん、死ね！」

いちごは真っ赤になって、拳志郎抱き上げていた腕を容赦なく放す。
それによって、拳志郎の頭は後頭部から廊下にぶつかって、ゴッンと大きな音を立てていたけど。
どう考えても自業自得だろう。

しかしまぁ、なんというか、仲がいいよねぇ、あのふたり。

「あははっ……。みんな、いつもどおりだっ……」

と、その様子を見ていた夢ちゃんが、控えめながら笑い声を響かせる。

「……そうだねっ！　わたしも、いつもどおりじゃなきゃダメだよねっ！」

続けてそう言った夢ちゃんの顔は、もうすっかり、いつもどおりの明るさを取り戻していた。

5

ぼくたちはそのあと、心配してくれてはいたけど理由はわかっていなかったいちごに、帰りの会で先生から言われたことを話しながら、ミューちゃんのもとへと向かった。

昼休みの件でミューちゃんが心配だったから、早足に歩きながらではあったけど、ウサギ小屋の横に着くまでのあいだに、いちごには状況を説明し終えていた。

「なによ、そんなことだったんだ。全然気にする必要ないじゃない。先生だって、咎めるつもりじゃないって言ってたんでしょ？　それなのにあんなに暗くなってたなんて、みんな顔に似合わずデリケートなのね！」

話を聞き終えたいちごは、そう言って笑っていたけど。

いちごがぼくたちに気を遣ってくれたのは、さっきのやり取りでもよくわかっていた。

クラスは違うけど大切な仲間なんだと、改めて感じた。

そんないちごの気遣いで、なんとなく温かな空気に包まれていたぼくたちではあった。

でも、冷たい風が容赦なく吹きすさび、温められたぼくたちの心を凍らせる。

いや、それはあたかもかまいたちのように、ぼくたちの心を切り裂いていったと言ってもいい。

それくらいの衝撃――。

残酷な現実が、ぼくたちの目の前に襲いかかってくる。

ここ最近は毎日訪れているウサギ小屋横の植え込み。
そこにはミューちゃんがタオルにくるまって隠れているはずだった。

でもその周囲が、真っ赤に染まっている。

ぼくたちは、あまりのことに声すら出せなかった。
そしてミューちゃんのタオルが微かに見え隠れする、植え込みとウサギ小屋の壁のあいだには、大きな茶色い毛並みの物体が……。

グルルルルル……。

それは、うなり声を上げる大型犬だった。
おなかをすかせているのか、異常なほどにヨダレを垂れ流すその犬の口からは、赤い液体がしたたっている。
牙のすき間には、切り裂かれたと思われる、鮮やかな色の肉片が……。

「きゃあああああああ！」

われに返り、悲鳴を上げるいちご。
その声で、夢ちゃんやみるくちゃんも悲鳴を重ね始めた。
いや、女の子たちだけじゃない。拳志郎や将流でさえも、うわああああ、と叫び声を上げていた。

これは……まさか、あの犬が、ミューちゃんを……！？

戦慄が走る。

あれ、でも、待てよ……？

このにおい……。

それに、この赤い液体……。

血というにはあまりにも赤く、鮮やかすぎる気が……。

ぼくは素早く、植え込みの近くにしゃがみ込む。

「ちょっと、降人くん！？　危ないわよ！？」

いちごが心配の声を向けてくるけど、ぼくは構わずに液体を指ですくって確かめる。

うん、やっぱり。

「あのさ、この赤いの、ペンキだよ」

「……え？」

ぼくの声に、みんな、呆然としたつぶやきをもらす。

と同時に。

「ミュー……」

植え込みの中に隠れていたのだろう、真っ赤に染まったミューちゃんが飛び出してきた。

「うわっ、真っ赤っかだっ！」

「……これも、ペンキだね」

ミューちゃんは、どうやら全身ペンキまみれになっているようだ。

そのすぐ横いは倒れた缶が見える。真っ赤なペンキはこの缶に入っていたようだ。

ぼくたちが騒いだりしたからだろうか、うなり声を上げていた大型犬は、のそのそと裏門のほうへと歩き去っていった。

と、不意に人の気配がした。

ぼくはとっさに、ミューちゃんをタオルでくるみ、植え込みの中に隠す。

「あ～あ、おまえら、ペンキぶちまけちまったのか。こんなとこに置いておいたオレも悪かったとは思うが」

「あっ、熊田先生！」

それは、熊田要港（くまだようこう）先生だった。

いちごのクラス、六年五組の担任で、とっても体格のいい体育会系の先生。中学校の体育教師の免許も持っているのだとか。

「ウサギ小屋の屋根を塗り直してくれって、頼まれてな～。それでペンキを用意して置いておいたんだが、誰も通らないと思って油断してしまった。ちゃんとフタも閉めてなかったし。悪かったな」

「いえ、それより、ペンキをダメにしてしまって、ごめんなさい」

実際にはぼくたちがペンキの缶を倒したわけじゃなかったけど、事を大げさにする必要もないと、ぼくは罪をかぶることにする。

他の誰もそれを否定しなかった。みんなもぼくと同じように考えていたのだろう。

「いや、それはいいさ。まだ予備もあるし、体育用具小屋から持ってくればいいからな。ところで……」

熊田先生はぼくたちに視線を巡らせ、質問をぶつけてきた。

「おまえらは、いったいここでなにやってるんだ？」
さらに視線をずらし、熊田先生はいちごを見据えると、こう続けた。
「というか、犬塚までいるのか。他のクラスの友達と遊んでたのか？　あっ、そうか、双子の妹とその友達か！」
自分ひとりで勝手に疑問を浮かべて、勝手に自己完結してくれたようだ。
ぼくたちとしては楽でよかったけど。
「そ……そうなんですよ！　ちょっと、その……、かくれんぼしてたんですよね！」
「ほ～、そうか～！　今どきの生徒にしては、子供っぽいことをしてるな！　いや、バカにしてるわけじゃないぞ？　いいことだと言ってるんだ。そもそもオレたちが子供の頃はだな～……」
いちごがその場をごまかすため、なにげなく放ったひと言。
それに熊田先生は思いのほか深く食いつき、ぼくたちは長々と先生の昔話を聞かされる羽目になってしまった。
しばらくして、ようやく長話は終わってくれたのだけど。
先生はまだ缶の中に残っているペンキだけでもウサギ小屋の屋根に塗ってしまおうと言い出した。
早く帰ってほしかったという意図もあり、ぼくたちも手伝いますよと申し出てはみたのだけど。
子供たちにウサギ小屋の屋根に登るなんて危険なマネをさせられ

るわけがないだろう、おまえたちは気にせずに遊んでていいぞ、と断られた。

とはいえ、ミューちゃんをタオルにくるんだまま植え込みに隠している状態で、今この場を離れるわけにもいかない。

ぼくたちは熊田先生がいなくなるまで近くにいる必要があったのだ。

というわけで、先生がウサギ小屋の屋根にペンキを塗っているあいだ、本当にかくれんぼをすることになるのだった。

「なんでこのボクが、かくれんぼなんてガキっぽいことを、しなければならないんだよ～」

という将流のボヤキや、

「あたち～、かくれんぼとか～、おにごっことか～、苦手なのにぃ～」

というみるくちゃんの泣き言をねじ伏せ、ぼくたちにはかくれんぼを始める以外に、選択肢は残されていなかった。

☆☆☆☆☆

熊田先生が帰ったあと、ぼくは慌ててタオルにくるんだミューちゃんを植え込みから引っぱり出した。

「ミュ～～～～～！」

心なしか怒っているようにも思えた。……って、それも当然か。

ともかく、よく調べてみると、ペンキまみれになったミューちゃんの服には、どうやら肉とかジャーキーとかが挟み込まれていたような形跡があった。

それをさっきの大型犬が食べて去っていったと考えられる。

ミューちゃんを隠していた場所の近くにペンキの入った缶が置いてあり、あの大型犬がぶつかって倒し、ミューちゃんもその犬も赤ペンキまみれになった。

そんなところだろうか。

「うわ〜ん、あたちの作った服も、ペンキでぐちゃぐちゃだよぉ〜。お洗濯して、綺麗になるかなぁ……」

みるくちゃんが涙を流しながら、ミューちゃんに着せていた服を脱がす。

なんとなくミューちゃんがホッとしているように見えたのは、はたして気のせいだろうか……。

それにしても、昼休みのウサギの件といい、今回の犬の件といい、いったいどうなっているのだろう？

「もしかしてミューちゃん、誰かに狙われてたりするのかな……？」

「ミュー……」

ぼくのつぶやきに、ミューちゃん自身も困ったような鳴き声を返していた。

6

次の日。
朝のエサ係の順番となったぼくは、珍しく余裕のある時間に登校していた。

最初にぼくがエサを家から持ってきたときはお刺身を食べさせたけど、どうやら生のものを食べさせるのは、おなかを壊す可能性があるからあまりよくないらしい。
というわけで、基本的にはみんなでお金を出し合って、キャットフードとか猫缶とかを買おう、という話になった。
そうやって買ってきたエサは、ミューちゃんを隠しているすぐ横の植え込みに、ビニール袋に入れて隠してある。

それにしても、今日は暖かいな。
四月も半ばを越え、桜の花びらもほとんどが散り終わっている。
そんな舞い散った花びらを踏みしめながら、ぼくは学校の正門から中庭を通り越して、ミューちゃんのもとへと急いだ。

ぼくたちが放課後にエサをあげたあと、次にミューちゃんが食事にありつけるのは、こうやって次の日に登校してきたときということになる。
だからミューちゃんは、おなかをグーグーと鳴らしながら待っているに違いない。
すぐ横の植え込みにエサの入った袋があるわけだけど、猫であるミューちゃんには、勝手に袋を開けて中からキャットフードとか缶詰を取り出して自分で食べる、なんてことができるわけもないし。

「ミューちゃん、お待たせ〜！」

「ミュー！」

ぼくがウサギ小屋の横をのぞき込むと、ミューちゃんの青い瞳が見つめ返してくれた。

「さあ、お食べ」

ぼくはカリカリのドライフードを、夢ちゃんが用意してくれていたエサ入れのお皿に乗せて差し出すと、ミューちゃんはそれをガジガジと美味しそうに食べ始める。

う～ん……。やっぱり、猫って可愛くて癒されるなぁ～。

別のお皿に水を注ぎながら、ぼくはぼんやりとミューちゃんを眺めていたのだけど。

「あれ？」

ミューちゃんが今食べてるのは、もちろんぼくがさっき袋の中から取り出したドライフードだ。

それなのに、ふと見るとミューちゃんの周囲には、ミンチ肉といった感じの物体、つまり、よく猫缶とかに入っているようなものの残骸が、ポロポロとこぼれ落ちているように見えた。

昨日の放課後は、大型犬とペンキ事件なんかがあったわけだけど、そのあとにエサ当番だった夢ちゃんがミューちゃんに与えたのも、確かドライフードだったはず……。

ぼくはビニール袋の中を急いで確かめてみる。

ミューちゃんのエサとして、ドライフードだけではなく猫缶も買ってはあった。

でも、どうやらその猫缶の数は減っていないようだ。

缶切りも袋の中に一緒に入れてあるけど、ミューちゃんが自分で

缶を切るなんてありえない。

これは……いったい、どういうことだろう？

じっとミューちゃんを見据えながら考える。

「ミュー！」

そんなぼくの様子なんて気にすることもなく、ミューちゃんは満足そうな鳴き声を響かせていた。

と、不意に予鈴の音が聞こえてくる。

急いで教室に向かわないと、遅刻になってしまうだろう。

ぼくは疑問を胸に抱えながらも、素早くビニール袋を植え込みの中にしまって教室へと向かうしかなかった。

☆☆☆☆☆

休み時間、移動教室の授業があるいちごと中学生である羽浮姉ちゃんを除いた肉球防衛隊のメンバーが、ミューちゃんの前に集まっていた。

最近は、黒猫と威嚇し合っていたり、ウサギに取り囲まれていたり、大型犬に襲いかかられたりと、なにやら慌ただしいことが多かったけど。

今日は今のところ、平和そうだった。

そこでぼくは、今朝の疑問を口にしてみることにした。

みんなの意見も、聞いてみたかったのだ。

「きっと善意の理解者が、わたしたちの活動を隠れて手助けしてくれてるんだよっ！」

とは、夢ちゃんの意見。

確かにそうやって、ミューちゃんにエサをあげてくれてる人がいる、というのなら、べつに問題はないとは思うのだけど。

「……あの、ぼく……、変な噂を、聞いたよ……？」

いつもながら、お姉さんである夢ちゃんとは対照的なほど控えめな声を上げたのは、希望くんだった。

「え？　どんな噂なのかな？」

ぼくの声に、希望くんはいつもどおりの小さな声ながらも、しっかりと答えを返してくれた。

希望くんが言うには、どうやら裏庭の奥辺り、つまりミューちゃんを隠しているこの付近で、なにやら怪しい人影の目撃情報が相次いでいるらしい。

見るからに怪しいのはその風貌で、帽子を深々とかぶり、サングラスとマスクで顔を覆っていたのだという。

まだたまに涼しい日もあるとはいえ、暖かい日も多くなってきているというのに、目撃されたときは必ずジャンパーを身にまとっていたみたいだから、その怪しさは相当なものだろう。

しかもその人は、きょろきょろと辺りをうかがい、ウサギ小屋の陰に隠れるようにして忍び足で歩いていたという話まであるようだ。

「はっはっは、なんというか、自分は不審者です、と言ってるよう

な格好だなぁ！」
「その人ってぇ～、ミューちゃんを狙ってたりするのかなぁ～？いじめたりとかも、するのかなぁ～？」
拳志郎がいつもの笑い声を伴って無責任な発言をすると、みるくちゃんがそれに反応して涙目になってしまう。
「どうだろうねぇ。聞いてる限りだとあまりにもあからさますぎるから、逆にその人が、さっき夢ちゃんが言ったように善意の理解者、って可能性もあるけど……。でもまぁ、どう考えても怪しいからねぇ～……」
将流は意外と冷静に考えているようだった。
「そうだね。その人がミューちゃんに善意でエサをあげてくれた、とは考えづらいよね。ぼくたちが隠れて飼ってるのを知ってて、その人も騒ぎにならないように隠れてエサをあげていたとしても、やっぱり不自然すぎる。いくらなんでも、余計に目立つ格好だってのは、自分でもわかるはずだし」
そしてぼくも、状況をしっかり把握するため、考えを口に出してみる。
でも結局、答えにはたどり着かない。
「それじゃあ、その人はいったい、なにをしていたんでしょうか？それに、猫缶の中身っぽいものが落ちていたっていう謎も残りますし……」
南ちゃんの疑問に、ぼくたちは誰も、これといった解答を示すことはできなかった。

それでも、ひとつだけ決まっていることはある。

「なんにしても、ぼくたちがミューちゃんを守るってのは、変わりないよ」

「……うんっ、そうだねっ！」

「はっはっは！　肉球防衛隊の活動強化が必要だな！」

「そうだねぇ～！　ボクたち肉球防衛隊で、絶対にミューちゃんを守り抜こう～！」（ふぁさっ）

『お～～～～～！』

勢いよくこぶしを振り上げたぼくたちは、よりいっそう結束を固め、ミューちゃんを守ろうと誓い合うのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7778x/

われら肉球防衛隊！

2011年10月21日03時00分発行